

宮沢賢治作

雪渡り

朗読

高橋美恵子

吉川やす子

曾我しづ子

第5卷 4. 宮沢賢治「雪渡り」

宮沢賢治（みやざわ けんじ）

宮沢賢治の履歴については「虔十公園林」の項参照。



本編の内容は「雪がすっかり凍った野原で四郎とかん子が狐の歌を歌っていると、本当に狐がやって来る。狐に団子を勧められたかん子は“狐の団子は兎のくそ”と歌う。狐は評判を取り戻すため二人を幻灯会に招待する」というもの。狐の子と人間の子の触れ合いを、賢治はファンタジックの中にも心温まる眼差しで描く。狐と人間の交歓の躍動感を表現するため、三人の「群読」でお伝えする。発表は1921年（大正10）。

「用語解説」

封蝋細工（ふうろうさいく）

松脂（まつやに）に油を混ぜ、ビン等を密封すること

寒水石（かんすいせき）

茨城県北部から産出する結晶質石灰岩。建築、装飾用に使用さる

雪がすっかり凍こおって大理石よりも堅かたくなり、空も冷たい滑なめらかな青い石の板で出来ているらしいのです。

「堅かたゆき雪かんこ、しみ雪しんこ。」

お日様がまっ白に燃えて百合の匂ゆりにおいを撒まきちらし又また雪をぎらぎら照ありました。木なんかみんなザラメを掛かけたように霜しもでぴかぴかしています。

「堅雪かんこ、凍しみ雪しんこ。」

四郎とかん子とは小さな雪ゆきぐつ沓くつをはいてキツクキツクキツク、野原に出ました。

こんな面おもしろ白い日が、またとあるでしょうか。いつもは歩けない黍きびの畑の中でも、すきで一杯いっぱいだった野原の上でも、すきな方までへどこ迄まででも行けるのです。平らなことはまるで一枚の板です。そしてそれが沢山たくさんの小さな小さな鏡のようにキラキラキラ光るのです。

「堅雪かんこ、凍み雪しんこ。」

二人は森の近くまで来ました。大きな^{かしわ} 柏^{かしわ} の木は枝^{えだ} も埋^{うず} まるくらい立派な透^す きとおつた氷柱^{つらら} を下^{つらら} げて重^{からだ} そうに身体^{からだ} を曲^お げて居^お りました。

「堅雪かんこ、凍み雪しんこ。狐の子あ、嫁^{よめい} ほしい、ほしい。」と二人は森へ向^{よめい} いて高く^{さけ} 叫^{さけ} びました。

しばらくしいんとしましたので二人はも一度叫^{よめい} ぼうとして息をのみこんだとき森の中か^{よめい} ら

「凍み雪しんしん、堅雪かんかん。」と云^い いながら、キシリキシリ雪をふんで白い狐の子が^い 出^い て来^い ました。

四郎は少しぎよつとしてかん子をうしろにかばって、しっかり足をふんばって叫^い びました。

「狐こんこん白狐、お嫁ほしけりや、とってやろよ。」

すると狐がまだまるで小さいくせに銀の針のようなおひげをピンと一つひねって云いました。

「四郎はしんこ、かん子はかんこ、おらはお嫁はいらないよ。」

四郎が笑って云いました。

「狐こんこん、狐の子、お嫁がいらなきや餅もちやろか。」

すると狐の子も頭を二つ三つ振ふって面白そうに云いました。

「四郎はしんこ、かん子はかんこ、黍の団子をおれやろか。」

かん子もあんまり面白いので四郎のうしろにかくれたままそつと歌いました。

「狐こんこん狐の子、狐の団子は兔うさぎのくそ。」

すると小狐紺三郎が笑って云いました。

「いいえ、決してそんなことはありません。あなた方のような立派なお方が、兎うさぎの茶色の団子なんか召めしあがるもんですか。私らは全体いままで人をだますなんてあんまりむじつの罪をきせられていたのです。」

四郎がおどろいて尋たずねました。

「そいじやきつねが人をだますなんて偽うそかしら。」

紺三郎が熱心に云いました。

「偽ですとも。けだし最もひどい偽です。だまされたという人は大抵たいていお酒に酔よったり、臆おくびよう病びょうでくるくるしたりした人です。面白いですよ。甚兵衛じんべえさんがこの前、月夜の晩私わたくしたちのお家の前まへに坐すわって一晩じようるりをやりましたよ。私らはみんな出て見たのです。」

四郎が叫びました。

「甚兵衛さんならじょうりじやないや。きっと浪花なわぶしだぜ。」

子狐紺三郎はなるほどという顔をして、

「ええ、そうかもしれませぬ。とにかくお団子をおあがりなさい。私のさしあげるのは、ちゃんと私が畑を作つて播まいて草をとつて刈かつて叩たたいて粉にして練つてむしてお砂糖をかけたのです。いかがですか。一皿さつりさしあげましょう。」

と云いました。

四郎が笑つて、

「紺三郎さん、僕は丁度いまね、お餅をたべて来たんだからおなかが減らないんだよ。

この次におよばれしょうか。」

子狐の紺三郎が嬉うれしがつてみじかい腕うでをばたばたして云いました。

「そうですか。そんなら今度げんとうかい幻燈会げんとうかいのときさしあげましょう。幻燈会にはきつといら

っしやい。この次の雪の凍った月夜の晩です。八時からはじめますから、入場券をあげて置きましょう。何枚あげましょうか。」

「そんなら五枚お呉れ。」と四郎が云いました。

「五枚ですか。あなた方が二枚にあとの三枚はどなたですか。」と紺三郎が云いました。

「兄さんたちだ。」と四郎が答えますと、

「兄さんたちは十一歳以下ですか。」と紺三郎が又尋ねました。

「いや小兄さんちいにいは四年生だからね、八つの四つで十二歳。」と四郎が云いました。

すると紺三郎は尤もつともらしく又おひげを一つひねって云いました。

「それでは残念ですが兄さんたちはお断わりです。あなた方だけいらっしやい。特別席をとって置きますから、面白いんですよ。幻燈は第一が『お酒をのむべからず。』これはあなたの村の太右衛門さんたえもんと、清作さんがお酒をのんでとうとう目がくらんで野原にあるへん

てこなおまんじゅうや、おそばを喰べようとした所です。私も写真の中にうつっています。

第二が『わなに注意せよ。』これは私共のこん兵衛が野原でわなにかかったのを画いたので
す。絵です。写真ではありません。第三が『火を軽べつすべからず。』これは私共のこん助
があなたのお家へ行って尻尾を焼いた景色です。ぜひおいで下さい。」

二人は悦んでうなずきました。

狐は可笑しそうに口を曲げて、キツクキツクトントンキツクキツクトントンと足ぶみ

をはじめてしっぽと頭を振ってしばらく考えていました。がやっと思いついたらしく、両手
を振って調子をとりながら歌いはじめました。

「凍み雪しんこ、堅雪かんこ、

野原のまんじゅうはポツポツポ。

酔ってひよろひよろ太右衛門が、

ツクトンントン。

そして三人は踊りながらだんだん林の中にはいつて行きました。赤い封蝋細工のほおの木の芽が、風に吹かれてピツカリピツカリと光り、林の中の雪には藍色の木の影がいちめん網あみになつて落ちて日光のあたる所には銀の百合ゆりが咲いたように見えました。

すると子狐紺三郎が云いました。

「鹿しかの子もよびましょうか。鹿の子はそりや笛ふえがうまいんですよ。」

四郎とかん子とは手を叩いてよろこびました。そこで三人は一緒に叫びました。

「堅雪かんこ、凍み雪しんこ、鹿しかの子あ嫁いほしいほしい。」

すると向うで、

「北風ぴいぴい風三郎、西風どうどう又三郎」と細い声がしました。

狐の子の紺三郎がいかにもばかにしたように、口を尖とがらして云いました。

「あれは鹿の子です。あいつは臆病ですからとてもこっちへ来そうにありません。けれどもう一遍いっぺん叫んでみましょうか。」

そこで三人は又叫びました。

「堅雪かんこ、凍み雪しんこ、しかの子あ嫁よめいほしい、ほしい。」

すると今度はずうつと遠くで風の音か笛の声か、又は鹿の子の歌かこんなように聞えま
した。

「北風びいびい、かんこかんこ」

西風どうどう、どつこどつこ。」

狐きつねが又ひげをひねって云いました。

「雪が柔やわらかになるといけませんからもうお帰りなさい。今度月夜に雪が凍ったらきつ
とおいで下さい。さっきの幻燈をやりますから。」

そこで四郎とかん子とは

「堅雪かんこ、凍み雪しんこ。」と歌いながら銀の雪を渡つておうちへ帰りました。

青白い大きな十五夜のお月様がしずかに氷ひの上かみやま山から登りました。

雪はチカチカ青く光り、そして今日も寒かんすいせき水石のように堅かたく凍こおりました。

四郎は狐の紺三郎との約やくそく束を思い出して妹のかん子にそつと云いました。

「今夜狐の幻燈会なんだね。行こうか。」

するとかん子は、

「行きましょう。行きましょう。狐こんこん狐の子、こんこん狐の紺三郎。」とはねあがつて高く叫さけんでしまいました。

すると二番目の兄さんの二郎が

「お前たちは狐のところへ遊びに行くのかい。僕も行きたいな。」と云いました。

四郎は困ってしまつて肩かたをすくめて云いいました。

おおい

「大兄さん。だつて、狐の幻燈会は十一歳までですよ、入場券に書いてあるんだもの。」
二郎が云いました。

「どれ、ちよつとお見せ、ははあ、学校生徒の父兄にあらずして十二歳以上の来賓らいひんは入場をお断わり申し候そろ、狐なんて仲々うまくやつてるね。僕はいけないんだね。仕方ない

や。お前たち行くんならお餅もちを持って行つておやりよ。そら、この鏡餅がいいだろう。」

四郎とかん子はそこで小さな雪ゆきぐつ沓ならをはいてお餅をかついで外に出ました。

兄弟の一郎二郎三郎は戸口に並んで立つて、

「行つておいで。大人の狐にあつたら急いで目をつぶるんだよ。そら僕らはや囃はやしてやろうか。堅雪かんこ、凍しみ雪しんこ、狐の子よめあ嫁よめいほしいほしい。」と叫びました。

お月様は空に高く登り森は青白いけむりに包まれています。二人はもうその森の入口に
来ました。

すると胸にどんぐりのきしきししょうをつけた白い小さな狐の子が立って居て云いました。

「今晚は。お早うございます。入場券はお持ちですか。」

「持っています。」二人はそれを出しました。

「さあ、どうぞあちらへ。」狐の子が もつと 尤もらしくからだを曲げて眼を め パチパチしながら

林の奥 おく を手で教えました。

林の中には月の光が青い棒を何本も なな 斜めに投げ込んだように射 こ して居りました。その

中のあき地に二人は来ました。

見るともう狐の学校生徒が沢 たくさん 山集 くり って栗の皮をぶっつけ合ったりすもうをとったり

こと 殊におかしいのは小さな ねずみ 鼠位 ねずみ の狐の子が大きな子供の狐の肩車に乗ってお星様

を取ろうとしているのです。

みんなの前の木の枝えだに白い一枚の敷布しきふがさがつていました。

不意にうしろで

「今晚は、よくおいででした。先日は失礼いたしました。」という声がしますので四郎とかん子とはびつくりして振り向いて見ると紺三郎です。

紺三郎なんかまるで立派な燕尾服えんびふくを着て水仙すいせんの花を胸につけてまっ白なはんけちでしきりにその尖とがったお口を拭ふいているのです。

四郎は一寸ちよつとお辞儀じぎをして云いました。

「この間は失敬。それから今晚はありがとう。このお餅をみなさんであがつて下さい。」
狐の学校生徒はみんなこつちを見えています。

紺三郎は胸いっばいを一杯に張ってすまして餅を受け取りました。

「これはどうもおみやげを戴いただいて済みません。どうかごゆるりとなすって下さい。もうすぐ幻燈もはじまります。私は一寸失礼いたします。」

紺三郎はお餅を持って向うへ行きました。

狐の学校生徒は声をそろえて叫びました。

「堅雪かんこ、凍しみ雪しんこ、硬かたいお餅はかつたらこ、白いお餅はべつたらこ。」

幕の横に、

「寄贈きぞう、お餅沢山、人の四郎氏、人のかん子氏」と大きな札ふだが出ました。狐の生徒は悦よろこんで手をパチパチ叩たたきました。

その時ピーと笛ふえが鳴りました。

紺三郎がエヘンエヘンとせきばらいをしながら幕の横から出て来て丁寧ていねいにお辞儀を
しました。みんなはしんとなりました。

「今夜は美しい天気です。お月様はまるで真珠しんじゆのお皿さらです。お星さまは野原つゆの露がキラ固まったようです。さて只今ただいまから幻燈会をやります。みなさんは瞬またたきやくしやみをしないうで目をまんまろに開いて見ていて下さい。

それから今夜は大切な二人のお客さまがありますからどなたも静かにしないといけません。決してそつちの方へ栗の皮を投げたりしてはなりません。開会の辞です。」

みんな悦んでパチパチ手を叩きました。そして四郎がかん子にそつと云いました。

「紺三郎さんはうまいんだね。」

笛がピーと鳴りました。

『お酒をのむべからず』大きな字が幕にうつりました。そしてそれが消えて写真がうつりました。一人のお酒に酔よった人間のおじいさんが何かおかしな円いものをつかんでいる景色です。

みんなは足ぶみをして歌いました。

キツクキツクトントンキツクキツクトントン

凍み雪しんこ、堅雪かんこ、

野原のまんじゅうはぽっぽっぽ

酔ってひよろひよろたえもん太右衛門が

去年、三十八たべた。

キツクキツクキツクキツクトントン

写真が消えました。四郎はそつとかん子に云いました。

「あの歌は紺三郎さんのだよ。」

別に写真がうつりました。一人のお酒に酔った若い者がほおの木の葉でこしらえたお
椀わんのようなものに顔をつつこ込んで何か喰たべています。紺三郎が白はかま袴はかまをはいて向う

で見ているけしきです。

写真が消えて一寸ちよつとやすみになりました。

可愛らしい狐の女の子が黍団子きびだんごをのせたお皿を二つ持って来ました。

四郎はすっかり弱ってしまいました。なぜってたった今太右衛門と清作との悪いものを知らないで喰べたのを見ているのですから。

それに狐の学校生徒がみんなこつちを向いて「食うだろうか。ね。食うだろうか。」なんてひそひそ話し合っているのです。かん子ははずかしくてお皿を手を持ったまま真っ赤になってしまいました。すると四郎が決心して云いました。

「ね、喰べよう。お喰べよ。僕は紺三郎ぼくさんが僕らを欺だますなんて思わないよ。」そして

二人は黍団子をみんな喰べました。そのおいしいことは頬ほっぺたも落ちそうです。狐の学校生徒はもうあんまり悦んでみんな踊りあがってしまいました。

キックキックトントン、キックキックトントン。

「ひるはカンカン日のひかり

よるはツンツン月あかり、

たとえからだを、さかれても

狐の生徒はうそ云うな。」

キック、キックトントン、キックキックトントン。

「ひるはカンカン日のひかり

よるはツンツン月あかり

たとえからだがちぎれても

狐の生徒はそねまない。」

キックキックトントン、キックキックトントン。

四郎もかん子もあんまり嬉うれしくて涙なみだがこぼれました。

笛がピーと鳴り幕は明るくなって紺三郎が又出て来て云いました。

「みなさん。今晚の幻燈はこれでおしまいです。今夜みなさんは深く心に留とめなければならぬことがあります。それは狐のこしらえたものを賢かしこいすこしも酔わない人間のお子さんが喰べて下すったという事です。そこでみなさんはこれから、大人になってもうそをつかず人をそねまず私共狐の今迄いままでの悪い評判をすっかり無くしてしまおうと思
います。閉会の辞です。」

狐の生徒はみんな感動して両手をあげたりワーツと立ちあがりました。そしてキラキラ涙をこぼしたのです。

紺三郎が二人の前に来て、丁寧におじぎをして云いました。

「それでは。さようなら。今夜のご恩は決して忘れません。」

二人もおじぎをしてうちの方へ帰りました。狐の生徒たちが追いかけて来て二人のふところやかくしにどんぐりだの栗だの青びかりの石だのを入れて、

「そら、あげますよ。」「そら、取って下さい。」なんて云って風のように逃^にげ帰って行きます。

紺三郎は笑って見ていました。

二人は森を出て野原に行きました。

その青白い雪の野原のまん中で三人の黒い影^{かげ}が向うから来るのを見ました。それは迎^{むか}いに来た兄さん達でした。